

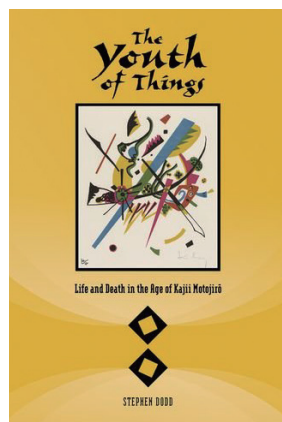
<特別寄稿>梶井基次郎研究を深化させるために： 鈴木貞美氏の書評論文にこたえて

著者	ドッド スティーブン
雑誌名	日本研究
巻	58
ページ	215-217
発行年	2018-11-30
URL	http://doi.org/10.15055/00007039

梶井基次郎研究を深化させるために

——鈴木貞美氏の書評論文にこたえて

ステイヴン・ドッド



拙著『青春のことども——梶井基次郎の時代の生と死』(Stephen

Dodd, *The Youth of Things, Life and Death in the Age of Kajii Motojirō*, University

of Hawai'i press, 2014) について鈴木貞美先生から頂戴した貴重な論

評(『日本研究』第五十六集収載)と識見にまずお礼を申し上げたい。

鈴木先生のような卓越した学者の方が、これほどの時間とエネルギー

を割いて、詳細な概説と分析をお寄せくださったことを光栄

に思っている。先生からは拙著の肯定的な面と併せて、至らぬ点

についても、徹底を極めたご指摘をいただいた。望むらくは、私

たち双方がこれまで梶井研究に注いできた努力が、近代日本の文

学史に重大な役割を果たした梶井基次郎という作家の価値と意味

に対して私たち双方が与える高い評価に匹敵するよう願ってやま

ない。

拙著における私の結論および省略された点に対して、鈴木先生

が時として厳しく批判を加えておられること、また結果として本

作が一層深まったかもしれない数々の異なるアプローチを示して

くださったことは、よく承知している。こうしたご指摘を私は真

剣に受け止めているが、それは先生が近代日本文学を専門とする

学者として高い評価を得ておられるからだけでなく、先生ご自身

が同じ梶井基次郎をテーマに広範な研究・執筆を続けてこられた

方だからである。およそ学者ならば、このような批判はいかなる

ものも積極的に受け入れ、今以上の努力と熱意を傾けて今後の業

績に活かすための奇貨とすべきだと思う。こうした考えに立つて、

その素晴らしさにもかかわらず英語圏ではこれまであまり知られ

てこなかった梶井文学に拙著が一石を投じ、将来にわたって内外

の学者による梶井研究の継続の一助となるよう願っている。

私の見解についてはすでに、上梓した二七〇頁におよぶ拙著に述べているので、鈴木先生の提起された点すべてをここで網羅しようとは思わないし、この返答もごく短いものに留めたいと思う。総じて、先生のお考えと私の考えにさほどの違いがあるとは思えない気もするが、論旨をもっと明確にできたはずだと思えるところもあるので、それに触れさせていたきたい。例えば鈴木先生は、私が日本のモダニズムは日本回帰運動で「終焉」したと述べているとおっしゃっている(すゝ)。私が言いたかったのは、日本のモダニズムが一九三〇年代に止んでしまったということではない。そうではなく、私自身の議論を進めるために、このころ文化の力点が変わったこと、具体的には、日本アイデンティティへの関心が日本回帰運動を通じて、さらに内向していったことに注意を向け直してみようとしたのである。鈴木先生はモダニズムの諸相が今日に至るまでに持続してきたかを詳細にたどつてみせてくださったが、私はこれに異議を唱えるものではない。どんな文学運動、文化運動も、時代のある時点で忽然と消滅するなどあり得ないことはもちろんだし、ある時代の概念や文学のトレンドが、フロイトの言う「抑圧されたものの回帰」メカニズムのごとく、後世の文学作品に再登場することは少なくない。モダニズムという点については、総じて私たちの見解が必ずしも対立する

とは思えない。

鈴木先生はまた、より説得力のある議論を導けたかもしれない、いくつかの文学的に重要な文献を、私が検討していないこととにも、特定の文学作品の広範な文化的、文学的背景を全面的に考慮していないことを指摘しておられる。先生のご助言を私は真剣に受け止めているし、もちろん自分の研究が至らないことも自覚している。実のところ、著作や評論をいったん仕上げると、私も自分の研究をさらに深めるべきであり、またそうできたはずだとも感じる。敢えて自己弁護させてもらえば、どんな著者も時間と分量の制約の中で、何を含め、何を排除するか、選択を迫られざるを得ない。完璧な本というものは存在しない。ただ、私の見解に明確な欠陥があるにしても、拙著が批判的な執筆者を少なくとも刺激し、その人々がこれを引き継いで、今後も梶井研究を続けていつて欲しいと考えている。

この機会にもう一点だけ明確にさせていただきたい。私は学術文書を書くとき、言葉の選択に極めて慎重であらうと心がけている。およそ文学を愛する者は誰でも一言一句にこだわるべきだが、時にはそれが叶わぬこともある。例えば、鈴木先生ご自身の著作『梶井基次郎の世界』について、私が「どこかの領域を深く掘り下げたものではない」(p. 175-176)と述べている点に、先生は言及されている。よく考えてみれば、この文言は私が先生のご著書をあ

たかも「浅い」かのように、否定的文脈でとらえているかに見える。しかし、それは私の意図するところではない。私がここで言うおうとしたのは、学者は自身の選んだ分野にそれぞれの個人的視点からアプローチするということである。しかしここでは先生が梶井作品に「より広く概括的な」視野から迫ろうとしておられることを、もつと正確な言葉で伝えられたはずだった。私の意図を理解いただくために申し上げるが、先生の『梶井基次郎の世界』をまだお読みになっていない読者の方々は、先生の今回の評論をお読みいただければ、拙著に込めた私の考えを先生がどれほど見事に「より広く概括的」にまとめておられるか分かるはずである。

なお、鈴木先生の評論に対してこの小文を掲載する機会をいただけたことを、前編集長の坪井秀人先生にお礼申し上げますとともに、これからの様々な角度から近代日本文学研究を続けていこうと志を新たにしていることを申し添えておきたい。

（翻訳・・朝倉和子翻訳家（SWEET所属））